Massimo La Rosa（マッシモ・ラ・ローサ / トロンボーン）

クリーヴランド管弦楽団首席奏者

1974年イタリアのパレルモ生まれ。パレルモ音楽院にてフィリッポ・ボナンノ（シチリア交響楽団の首席トロンボーン奏者）に師事。
1996年から2007年まではベニスのフェニーチェ歌劇場管弦楽団の首席トロンボーンを務め、またミラノ・スカラ座管弦楽団、ローマ聖チェチーリア管弦楽団、フローレンス歌劇場管弦楽団でもソロ・トロンボーンを務める。
2007年9月に首席トロンボーンとしてクリーヴランド管弦楽団に入団。2013年2月にオーケストラの定期演奏会でソロデビューを果たし、その際ニーノ・ロータ作曲のトロンボーン協奏曲を披露。これまでに、日本のサイトウ・キネン・オーケストラでも首席トロンボーン奏者として演奏。
現在、クリーヴランド音楽院で教鞭をとっており、アメリカ、ヨーロッパ、日本と南米の主要な音楽院でのリサイタルやマスタークラスを行っている。
また、社会的大義にも積極的に取り組んでおり、最近網膜疾患を持つ子どもに財政支援や治療を提供する組織、ANFE Light of Life 基金のためにクリーヴランドやデトロイトのイタリア領事館と共同でいくつかの給付金リサイタルを行い、数千ドルの寄付を集めることに貢献している。
バック・トロンボーン・アーティストとして、自身の名を冠したマッシモ・ラ・ローサ バルブを導入した新しいバック・アルティザン・トロンボーンA47MLRをコーン・セルマ―社と共同開発した。

呉 信一（ご・しんいち / トロンボーン　※大阪公演のみ）

大阪音楽大学卒業。
大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。1975年西ドイツ、デットモルト国立音楽大学に留学。大阪文化祭奨励賞、本賞を受賞。
現在、東京音楽大学教授、京都市立芸術大学名誉教授、大阪芸術大学客員教授、相愛大学客員教授、大阪音楽大学講師、大阪教育大学講師。
サイトウ・キネン・オーケストラ、ジャパンブラス・コレクション、いずみシンフォニエッタ大阪の各メンバー。ハイブリッドトロンボーン四重奏団主宰。
関西トロンボーン協会会長。

林 浩子（はやし・ひろこ / ピアノ）

桐朋学園大学卒業後、同大学アンサンブル・ディプロマコース修了。1994年オーストリア・サマーフェスティバルにて優秀賞受賞。1995年やちよピアノコンクール第1位入賞、併せて市長賞を受賞。2000年北海道・旭川新人賞受賞。
映画"記憶の音楽Gb"（2002年6月公開）では黒澤優が演じるピアノ音楽の吹き替えを担当（サウンド・トラック盤がトイズファクトリーよりリリース）。これまでに、スコット・ハートマン、ロルフ・スメドヴィク、オーレ・エドワルド・アントンセン、フリッツ・ダムロウ、エリック・ターヴィリガー、マッシモ・ラ・ローサの各氏と共演、ホルン奏者・丸山勉氏監修によるディズニー作品集【模範・ピアノ伴奏CD/ピアノ伴奏譜付】出版、トロンボー ン奏者・荻野昇氏や郡恭一郎氏とのCDがリリースされるなど、ソリスト、共演者として幅広く活躍している。

Bach
STRADIVARIUS
MADE IN THE USA
NONAKA BOEKI CO.,LTD.

The Artisan Collection
・BACH STRADIVARIUS・

ラ・ローサ開発モデル

Made in U.S.A.

アルティザン
A47 MLR／「ラ・ローサ」モデル

調子　B♭/F
ベル　アルティザン彫刻 8 1/2" ベル
ボア　13.90mm（太管）
バルブ「ラ・ローサ」モデル オープンラップ
仕上げ イエローブラス
他　フラットリム及びソルダードスティールワイヤーベル
リバース・メインチューニングスライド
アルティザンスタイル・ウォーターキー

マッシモ・ラ・ローサ
クリーヴランド管弦楽団
首席トロンボーン奏者

645,000円（税抜）

※表示価格は2016年4月1日現在のもので、税抜です。

野中貿易株式会社 NONAKA BOEKI CO.,LTD.
総輸入元　野中貿易株式会社　〒231-0011 横浜市中区太田町4-46 TEL.045-211-2022（代）
総発売元　株式会社ノナカ　〒231-0011 横浜市中区太田町4-46 TEL.045-212-0332（代）
野中貿易サイト　www.nonaka.com
Bachサイト　www.nonaka.com/bach/

Bach
野中貿易株式会社 NONAKA BOEKI CO.,LTD.

マッシモ・ラ・ローサ
クリーヴランド管弦楽団首席奏者
トロンボーンリサイタル

大阪公演	東京公演
2016年6月1日（水）	2016年6月3日（金）
19:00 開演	19:00 開演
ザ・フェニックスホール	Hakuju Hall

マネジメント：インターミューズ・トーキョウ
主催：野中貿易株式会社
協力：コーン・セルマー社　株式会社ノナカ
後援：日本トロンボーン協会　関西トロンボーン協会

マッシモ・ラ・ローサ トロンボーンリサイタル

MASSIMO LA ROSA

プログラム

ペルゴレージ「シンフォニア」
Giovanni Battista Pergolesi "Sinfonia"
(Arr.by MASSIMO LA ROSA)

マーラー「さすらう若人の歌」
Gustav Mahler "Songs of the Wayfarer"

ビゼー「歌劇"真珠採り"より 二重唱"聖なる神殿の奥深く"」
Georges Bizet
" Les Pecheurs de Perles《Au fond du Temple Saint》"
※大阪公演のみ

～休憩～

グレンダール「トロンボーン協奏曲」
Launy Grøndahl "Concert for Trombone"

ワーグナー「夢」
Richard Wagner "Traume"
(Arr.by MASSIMO LA ROSA)

W.A.モーツァルト
「ジングシュピール"魔笛"より パパパの二重唱」
Wolfgang Amadeus Mozart" Pa pa pa - Die Zauberflöte"
(Arr.by Tkahiro Tsuji 2016)
※大阪公演のみ

ラーション「トロンボーン・コンチェルティーノ」
Lars-Erik Larsson"Trombone Concertino, Op.45, No.7"

■出演

マッシモ・ラ・ローサ(トロンボーン)

呉 信一(トロンボーン)
※大阪公演のみ

林 浩子(ピアノ)

曲目解説 …… 佐伯茂樹(音楽評論、古楽器奏者)

ペルゴレージ「シンフォニア」
Giovanni Battista Pergolesi "Sinfonia"
(Arr.by MASSIMO LA ROSA)

バロック時代のイタリアの作曲家ジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ(1710～1736)の「チェロと通奏低音のためのシンフォニア」へ長調が原曲です。シンフォニアというと、オペラの序曲や交響曲のイメージがありますが、この曲は独奏チェロと通奏低音のソナタの形になっていて、「コモド(ゆったりと)」「アレグロ」「アダージョ」「プレスト」の4つの楽章で構成されています。いずれの曲も、歌謡性と快活なリズムに溢れていていかにもペルゴレージらしい作品です。このうちの第4楽章は、イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882～1971)がバレエ組曲「プルチネルラ」の第7曲で引用されており、その旋律をトロンボーンが吹いているので、聴いたことがある方は多いかもしれません。ちなみに、「プルチネルラ」の他の曲も、ペルゴレージの作品の引用と言われてきましたが、研究の結果、ドメニコ・ガロ(1730～ca1768)のトリオソナタであることが判明しました。本日の演奏は、マッシモ・ラ・ローサがトロンボーンとピアノのために編曲したものをお届けします。

マーラー「さすらう若人の歌」
Gustav Mahler "Songs of the Wayfarer"

交響曲でおなじみのオーストリア出身の作曲家グスタフ・マーラー(1860～1911)が、1885年に作曲した連作歌曲集です。ピアノ伴奏の形で書かれましたが、マーラー自身が管弦楽伴奏の形にも編曲しており、現在ではどちらの形でも演奏され親しまれています。作詞もマーラー自身がおこなっていて、「恋人の婚礼の日に」「朝の野を歩けば」「燃えるような短剣を持って」「恋人の青い目」の4曲で構成されています。「さすらう若人」というのは、恋人と失恋して旅に出るという意味合いもありますが、それと同時に、ドイツのマイスター制度で知らない地域に旅をして、その地のマイスターの下で修行して周るという習慣も含まれています(その点はシューベルトの「冬の旅」と同じです)。第1曲の「恋人の婚礼の日に」では、恋人が別の男性と結婚した悲しみと苦しみを、第2曲の「朝の野を歩けば」では、朝に野を歩いて自然に触れ合う喜びを、第3曲の「燃えるような短剣を持って」では、恋人を憎み剣で刺したいという思いで苦しむ様子を、第4曲の「恋人の青い目」では、それまでの苦しみを回顧し、菩提樹の下で眠り未来が好転することを夢を見るという内容。このうち、第2曲は、交響曲第1番「巨人」第1楽章の主題として使われ、第4曲は、同曲第3楽章の中間部で使われました。

ビゼー「歌劇"真珠採り"より 二重唱"聖なる神殿の奥深く"」
Georges Bizet " Les Pecheurs de Perles《Au fond du Temple Saint》"

19世紀フランスの作曲家ジョルジュ・ビゼー(1838～1875)が、1863年に作曲した歌劇「真珠採り」の第1幕でテノールとバリトンで歌われる二重唱です。「真珠採り」は、セイロン島を舞台にしたオペラで、かつての恋敵だった二人の真珠採りの前に、尼僧になったかつての恋人が現れたことで引き起こされる悲劇を描いたもの。この「聖なる神殿の奥深く」では、真珠採りのナディールとズルガが過去の恋と互の友情を歌います。

グレンダール「トロンボーン協奏曲」
Launy Grøndahl "Concert for Trombone"

デンマークの作曲家ラウニ・グレンダール(1886～1960)が、1924年にトロンボーン独奏と管弦楽のために書いた協奏曲です。グレンダールは、コペンハーゲン王立管弦楽団のトロンボーンセクションにいたアントン・ハンセンとヴィルヘルム・オールクローという2人の名手たちの演奏に触発されて作曲したと言われています。初演は、同団とオールクローの独奏でおこなわれました。グレンダールは、デンマークを代表する作曲家カール・ニールセンに作曲を学んでおり、この作品にもその影響が色濃く現れています。
曲は、3つの楽章を持つ典型的な協奏曲の形で描かれていて、伴奏の劇的な和音に導かれてトロンボーンがドラマティックな音楽を展開する第1楽章、「Quasi una Leggenda(伝説のように)」というタイトルが付いていて、トロンボーンが神秘的な歌を歌う第2楽章、第1楽章の主題が変形したものから展開しロンドの音楽になり、最後はまた第1楽章の主題で終結する第3楽章という構成。オーケストラのトロンボーンセクションの影響を受けたこともあって、力強い低音域を効果的に使用している点も興味深いところです。

ワーグナー「夢」
Richard Wagner "Traume"
(Arr.by MASSIMO LA ROSA)

19世紀ドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナー(1813～1883)が、楽劇「トリスタンとイゾルデ」と同時期の1857～58年に作曲した「ヴェーゼンドンク歌曲集」の中の1曲。「ヴェーゼンドンク歌曲集」は、ワーグナーのパトロンだったスイスの大富豪オットー・ヴェーゼンドンクの妻でワーグナーの不倫相手でもあったマティルデ・ヴェーゼンドンクが作った詩にワーグナーが作曲した歌曲集です。「天使」「とまれ」「温室にて」「悩み」「夢」の5曲で構成されており、当初はピアノ伴奏の歌曲として作曲しましたが、第5曲の「夢」は、ワーグナーによって管弦楽伴奏の形に編曲され、マティルデ・ヴェーゼンドンクの誕生日にサプライズ演奏されました。この「夢」は、愛する人への不変の想いを夢の形で歌ったもので、同時に作曲を進めていた楽劇「トリスタンとイゾルデ」第2幕の愛の場面でもこの旋律が使われています。本日は、マッシモ・ラ・ローサがトロンボーンとピアノのために編曲した版でお届けします。

W.A.モーツァルト「ジングシュピール"魔笛"より パパパの二重唱」
Wolfgang Amadeus Mozart " Pa pa pa - Die Zauberflöte"
(Arr.by Tkahiro Tsuji 2016)

18世紀オーストリアの作曲家ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)が作曲したドイツ語劇《魔笛》の中で、パパゲーノとパパゲーナが歌う二重唱。パパゲーナを探していた鳥刺しパパゲーノが、魔法の鈴を振ったことでパパゲーナに出会い、二人は結ばれるというもの。お互いの名前を呼び合って「パ、パ、パ」と歌う楽しい歌です。

ラーション「トロンボーン・コンチェルティーノ」
Lars-Erik Larsson "Trombone Concertino, Op.45, No.7"

20世紀スウェーデンの作曲家ラーシュ=エリク・ラーション(1908～1986)が、1955年にトロンボーン独奏と弦楽合奏のために書いたコンチェルティーノ(小協奏曲)です。ラーションは、1953年から1957年にかけての5年間に、12種類のさまざまな楽器を独奏楽器にした「12のコンチェルティーノ」Op.45を作曲しましたが、その7曲目の曲がこの「トロンボーン・コンチェルティーノ」なのです。ラーションは、若いときにウィーンでアルバン・ベルクから作曲を学んだりしましたが、その作風自体は保守的で、新古典主義に近いと言っていいでしょう。
この「トロンボーン・コンチェルティーノ」は、短いながらも3つの楽章を持つ形式で書かれており、トロンボーン独奏がカデンツァ風のモノローグを奏でる「前奏曲」と題された第1楽章、伸びやかに歌う「アリア」と題された第2楽章、速いパッセージが要求され、どこかコミカルな「フィナーレ」の第3楽章という構成。グレンダールと並んで、20世紀に書かれたトロンボーンのためのオリジナル作品として重要なレパートリーになっています。